

植民都市新京を眺める詩人と表象される都市：朴八陽、李吉生の詩を中心に

金, 晶晶
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1901718>

出版情報：九大日文. 28, pp.91-111, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

植民都市新京を眺める詩人と 表象される都市

—— 朴八陽、李吉生の詩を中心に ——

KIN Shoushou
金 晶 晶

一、はじめに

一九四一年一月十九日の『満鮮日報』^①の文芸欄に「放浪児」というペンネームで「季節の幻想（原題―季節の幻想）」という一編の詩が載せられた。そしてこの詩は一九四二年九月に吉林で発刊される『満洲詩人集』^②にもう一度掲載されるのだが、それによつて詩の作者は満鮮日報社で社会部長兼学芸部長を務めていた朴八陽^③であることが確認できる。朴八陽は一九三七年に「満洲」に渡り、満鮮日報社に勤めながら『満鮮日報』の編集と発刊に関わっていた人物であるが、その新聞紙上で彼自らが詩を発表することは大変珍しいことであつた。

この詩が載せられた『満鮮日報』は、一九三七年十月二日から終戦に至るまで「満洲国」の首都「新京」において、朝鮮語で発刊された日刊新聞である。それより以前に「満洲」で発刊されていた朝鮮語新聞である『満蒙日報』^④と『間島日報』^⑤

を統合して、「満洲国」の建国理念や日本の植民地政策を正当化し、「満洲」に住む朝鮮人に広めるために「満洲国」唯一の朝鮮語新聞として残された国策新聞であつた。その『満鮮日報』に設けられていた文芸欄には、朝鮮半島や「満洲」に住む文学者や学生が作品を投稿することができ、当時日本による言論弾圧のため朝鮮語創作が自由ではなかつた朝鮮人文学者にとつては、母国語で文学作品を公に発表できる数少ない場の一つであつた。

しかし、『満鮮日報』は日本の植民地・「満洲」で発刊されている国策新聞であるという性格上、当然そこには日本政府による監督や検閲の力が働き、どのような作品でも自由に投稿して掲載が許可されるわけではなかつた。政府によつて在満朝鮮人が積極的に書くように推奨されていた投稿作品の部類は、「満洲」における朝鮮人の生活を扱つた「実話的」^⑥なもので、国策推進に協力的な作品であつた。当時『満鮮日報』の新春文芸欄に受賞作として連載される小説などはそのような政府の要求に迎合するような傾向が見て取れる一方で、国策新聞である『満鮮日報』が推進している「満洲国」の建国理念や植民地政策とはかけ離れていて全くそぐわないような詩や評論文も部分的に存在していた。

本論文で取り上げる朴八陽と李吉生^⑦の詩二篇は、一見「満洲国」の国都新京の近代的な風貌を詠つた国策推進に協力的な作品に見える。チェ・サムリョンは「朴八陽の二つの顔とその表情」^⑧という論文の中で、朴八陽の「季節の幻想」と「愛す

ること」という二編の詩はどちらも「時局に対する肯定の情緒が充滿している」と述べている。さらに「満洲国」建国十周年という祝祭の雰囲気の中で、満洲国の建国理念である王道樂土や五族協和、満洲国建国十周年を歌い、満洲を生に溢れ、未來への希望がわく地として歌っている」と述べている。

これとは少し異なる見方を提示しているのがコ・ボンジュン、イ・ソニの「一九三〇年代後半の詩の都市表象研究——オ・ジャンファン、キム・クァンギユン、朴八陽を中心に」⁸⁾という論文である。ここでは朴八陽の詩の中で都市を題材とする作品に幅広く言及しながら、都市を背景とする彼の詩には、軽快な印象から出発して憂鬱な感情に帰結し、時間帯は朝に始まり夜で終わるという共通した詩の構造が見られる点を指摘している。その上で朴八陽が都市を描写する際の態度が「資本主義を克服しようとする意志や植民地の現実に対する理解から出発したのではなく、都市の両面性すなわち光と暗闇が交叉する場所として「都市―街」をとらえているからであり、黄昏と夜の時間間に都市に生きる人の疲労、幻滅、憂鬱、孤独等を読んでいることとしていいるから」だと結んでいる。チェ・サムリョンの論文では朴八陽が「満洲」で書いた詩の内容を詳しく分析せずに作品についての論者の印象を述べていたのに対し、コ・ボンジュン、イ・ソニの論文では一九二〇年代から一九三〇年代初めにかけて朴八陽が都市を題材とした詩の内容に詳しく言及し、そこに共通した詩の構造が見られると指摘した点は大変興味深い。しかし「三〇年代後半以降には両義的対象としての「都市」

という素材までもが詩から消えてしまっている」と述べているように、「季節の幻想」も「満洲」の都市を描いているにもかかわらず、考察対象から抜け落ちてるように思われる。

もつとも最近の先行論文であるチェ・ユンジョンの「朴八陽詩研究」⁹⁾では、朴八陽の詩がプロレタリア詩としてみると資本主義批判の傾向性が不足しており、モダニズム詩としてはモダニズムの本質に到達していないという先行論に対し、「朴八陽の詩は流派的な思潮に埋もれないことで一貫した詩的傾向をもつことができた」のだと主張している。つまり朴八陽の詩に資本主義や都市の近代化に対する批判のメッセージが強く見られないように感じるのは、朴八陽自身が植民都市に生きる群衆と常に距離を置いて観察し、その群衆の一員になることを拒んだためであると述べられている。

これらの先行研究を見ていくと、全く異なる性質の朝鮮プロレタリア芸術家同盟と九人会両方に加入した経歴を持つ詩人朴八陽は詩人としては興味深いのが、彼の作品を系譜的に論じる際は作品の傾向や特色がはつきりしていないところが却って詩人朴八陽と彼の詩作品の評価を難しくしているようであった。さらに一九三七年に「満洲」に渡ってからは国策新聞『満鮮日報』の政治社会部長を務め、満洲弘報協会にも参加していたことから日本の植民地政策を「満洲」に広めるのに貢献した人物という負のイメージが付き、それゆえ彼が「満洲」で発表した詩や評論などの文学作品には国策に協力的だという先入観がつきまといつていたように思われる。近年少しずつ彼の詩を読み直そう

とする動きが始まってはいるが、本論で取り上げられる詩「季節の幻想」を詳しく取り上げ、分析した先駆論文はまだ見当たらないままである。

そこで本論文では、これまで先行研究であまり取り上げられなかった、あるいはあまり知られてないゆえに研究対象から抜け落ちていた朴八陽の「季節の幻想」とこの詩同様に新京の都市を描いた李吉生の「大同大街」を取り上げ、朝鮮人である彼らの目に異国の植民都市新京はどのように映り、それが詩の中のどのように表象されているのかを明らかにしたい。

二、朴八陽「季節の幻想」における語り手の沈黙が語るもの

「季節の幻想」という詩が朴八陽の実名とともに掲載されたのは『満洲詩人集』⁽¹⁰⁾が初めてであった。一九四二年九月に「満洲国」建国十周年記念という名目で発刊された同詩集には、朴八陽の「季節の幻想」と「愛すること（原題—사랑함）」という二編の詩と彼自身が執筆した本の序文が載せられている。本論文で取り上げる朴八陽の「季節の幻想」という詩は、『満洲詩人集』の発刊前である一九四一年一月十九日、『満鮮日報』に「放浪児」という筆名で発表されたことがあった。『満洲詩人集』に「季節の幻想」が載せられなければ、この詩は作者未詳のまま特別取り上げられることがなかったのかもしれない。一度は名前を伏せて発表した作品を自身が編集を務める記念すべき詩集に本名でもう一度掲載したことから朴八陽のこの詩に対

する特別な思い入れがあったのだろうと推測される。以下に引用しているのが『満鮮日報』に載せられた詩「季節の幻想」の筆者による日本語訳である。

季節の幻想⁽¹¹⁾

朝夕行き来する私の街は

私にとつて一つの奥深く心地よい密林です

沈黙しながら歩く私の重い行進の中で

私は五色の夢と虹を見ます。

白雪の大同広場の上に瞑想を踏みながら⁽¹²⁾

世紀の驚異の中を私は移動します

康徳会館は正に中世期の重厚な城郭

海上『ビルディング』は陸地の上の巨艦⁽¹³⁾です。

『バス』は尻を揺らす洋豚の群れ

牧者もなくぶつぶつ言いながら群がって来ては行く

『ニッケ』は『スマート』に洋装したお嬢さん

『オリジナル』香水の匂いがふんと押し寄せます。

大陸の太陽が西方の空の上で真紅になる時

私は時折『バス』の中で雑木のように佇立して

この国の男女同胞の体温と重量に堪え忍んだりもします

窓外には建物群が竜宮のようにゆらめいています。

季節に乗って青春が逃亡するということは

『センチメンタリスト』でなくても嘆息することでしょう
どこの壁面に褪色していない丹青があるうとは思いますが
罪なき童心が久遠の青春を夢見ます。

広野を航行するこの思索する雑木が

時には行者のごとく素朴な岩を求め

時には奔放な舞女のように多彩と恍惚を偲びながら

沈黙と饒舌の中でむなしく季節を送迎します。

この詩の中で語り手は絶え間なく街の中を移動しているが、登場する場所や建物の名前から語り手が詩の中で移動している場所は、かつて「満洲国」の首都であった新京の中心を走る大道大街沿いであることがわかる。詩の第二連で登場する「大同広場」(図一)は、新京駅前から延びる大同大街の途中にある大きな広場で、そこから放射状に大通りが広がる新京市街地の要となる場所であった。またその広場をぐるっと囲むように首都警察庁、電信電話会社、満洲中央銀行などの大きな建物が建てられていた。その広場からまっすぐ南に延びている大同大街を歩いて行くとすぐに「康徳会館」(図二、図三)と「海上ビルディング」(図三)が見えてくるのであった。

つまり詩「季節の幻想」では、語り手が新京の最も中心部で



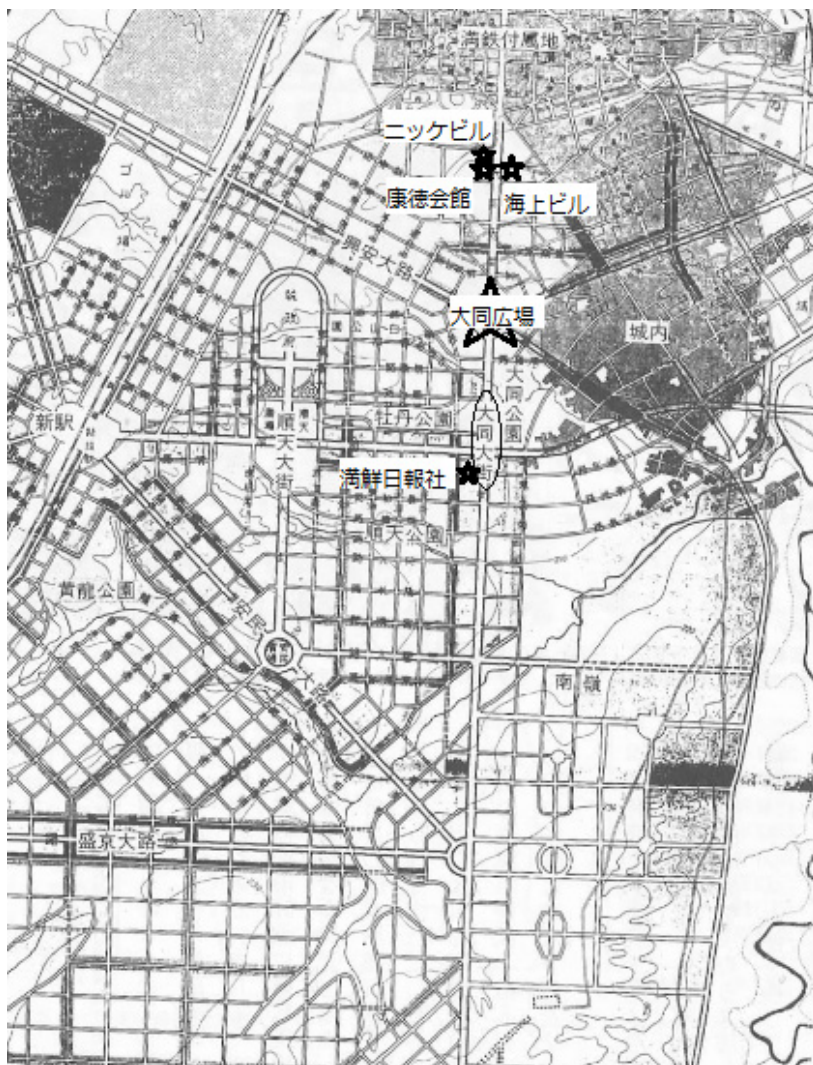
図一 大同広場



図二 大同大街と左手前に見える康徳会館、その隣に位置するニッケビル



図三 康徳会館(左)と海上ビル(右)



図四 国都建設計画図

ある大同広場を出発し、そこから北の方向へ延びる大同大街を歩いて移動しながら目にした様々なものが描かれている。この語り手をそのまま作者である朴八陽に置きかえて見ると、当時彼が勤めていた満鮮日報社(図四)は大同広場以南の大同大街を途中で西に曲がった角に位置していたことから、詩の中に登場する場所や建物は全て朴八陽自身がほぼ毎日その前を通り過ぎ、目にしていた風景、たっただと思われる。

詩の第一連で語り手は、自身が朝夕行き来する街を「一つの奥深い密林」にたとえている。大同大街を挟んで両側には当時大きな百貨店や商業施設、オフィスビルが建ち並んでいたが、そのような近代的な建造物をあえて自然そのままの木がうつそうと生い茂る密林にたとえているところに都市の近代化に対する作者の皮肉が込められていると考えられる。しかも密林は熱帯地方にしかなく、その内部を知らない外の人間にとつては一步中に入るとどんなことが起こるか予測できないような不気味で恐ろしいイメージを持つ場所でもある。よつて「密林」という比喩表現からは、自分自身が日々目している都市風景を得体の知れない不気味なものとして感じ取っている語り手の心情を察することができるのではないだろうか。語り手はその深い「密林」のような新京の中心部を重い足取りで沈黙しながら、しかし一方では「五色の夢と虹を見」ながら「重い行進」を進めていくのである。ここで「五色の夢」は日本が満洲国統治にあたって掲げた理念である「五族協和」を指しており、「虹」は「満洲国」に対する日本の「夢」と理想を込めた五色の満洲

国旗であると考えられる。詩の第一連では「王道楽土」や「五族協和」という「夢」を見ながら語り手も静かに全体の中で足並みをそろえて歩を進めていることが読み取れる。

そんな満洲国の理想や理念を頭に描き、「冥想」しながら語り手が歩き進むのは、新京市街地の中でもつとも近代的で立派な建物が立ち並ぶ大同大街である。西澤泰彦は大同広場と大同大街の道路沿いに立ち並ぶ建築物について以下のように述べている。

満鉄が鉄道附属地の支配能力を示すには、少なくとも、中国各地の列強支配地における建築物と同等同質の建築物を満鉄が建てる必要があつた。これは、満鉄が列強に対してその支配能力を示す意味と、被支配者に対して彼らの生活環境の向上を標榜しながら満鉄による支配の正当性を示すという意味があつた。そのために、世界水準の建築物が必要とされた。(略)そして、「満鉄建築」は、列強諸国が中国各地で建てていった建築物と比肩しうるために、西洋建築に依拠した建築でなければならなかつた。⁽¹⁴⁾

「新京」は地理的に日露の鉄道の接点というだけでなく、覇権の接点でもあつたため、立派な中心市街地が作られていく過程は日本の国力や経済力をロシアや西欧列強国に誇示する格好の機会であつた。そこで日本は「満洲国」の首都となる新京を建設する際、元々長春にあつた長春城を取り壊し、ほとんど何

もない状態から都市計画を練って市街地を建設し、政府機関庁舎を増やしていったのである。

また西澤氏によると、「満州国政府にとつて首都建設の視覚化は、傀儡政権のイメージを払拭するため」にも必要であり、内外に大きなインパクトを与えるために首都である新京の都市計画は壮大に演出される必要があったという。さらに国家の威信をかけた首都新京建設の産物である「満鉄建築」は、被支配民に対しては経済力や生活環境の向上を標榜しながら日本政府に対する劣等感を味わわせ、いつそう精神的に支配力を強めていく効果も期待できた。このように被支配者や西欧列強国に日本の力をアピールし、強い印象を与えるための生きた宣伝広告となつたのが国都・新京そのものであつたと言える。詩の冒頭で登場する大同広場は、新京に建設された新市街の中央に位置する大きな広場であり、そこから新京の各所に通じる大きな道路が放射状に広がる構造になつていた。都市の中に複数の広場を設け、それらを見通しのよい大きな街路で結ぶ手法は、十九世紀のヨーロッパの都市計画の主流であつたと同時に、帝政ロシアが大連で用いた手法と同様である。その手法をそのまま借用して建設した結果、大同広場の中心に人が立つと新京の中心街が三六〇度見通せるような景観が生まれたのである。

「季節の幻想」の語り手も詩の第二連では大同広場に立つて、植民都市新京の中心市街を眺めたことだろう。しかしそのような壮大な景観と広場にそびえ立つ、大きな「満鉄建築」に語り手は言及することなく、その広場の上に降り積もっている白雪

を踏みながらそこから立ち去るのである。重く、壮大な建築物が建ち並ぶ広場の景観に対して軽い白雪を対峙させているところには、満鉄の巨大な資本によつて作られた近代的建築物を真っ白な雪で包み隠し、軽く受け流すような語り手の態度が読み取れる。大同広場を抜けて、次に語り手の目に止まるのは「重厚な城郭」のような康徳会館と「陸地の上の巨艦」を彷彿させる海上ビルディングである。この二つの建物はちょうど大同大街を挟んで真向かいに建てられていたのだが、語り手はそれらを「世紀の驚異」だと表現し、近代的な建物群に対する自身の驚きを表現しながらやはり黙々とその間を通り過ぎるだけである。

そして詩の第三連にあるようにそばにある大同大街の道路に目をやると、太つた豚の群れのごとく尻を揺らしながら行き来するバス（図二）が目に入るのである。街を走るバスがたとえられている豚は、聖書においては汚れた存在として、また物欲に眼がくらし、本当に貴いものに気付かず霊的な状態が低くなつている人のたとえとしてよく用いられる動物である。一方、「牧者」は聖書でイエス・キリストを意味することから、「新京」市内を走るバスが導かれる目的地も方向もないことに不満を持ちながら集団で群がって移動するさまは、第一連で「五色の夢と虹」を夢見させられながら回りに歩調を合わせて黙々と行進する語り手の状況と重ねてみることができる。

そして三連の三行目に登場する『ニッケ』とは康徳会館のすぐ隣に位置する日本毛織株式会社が所有するビル（通称ニッケビ

ルディング)であり、この建物は当時百貨店と日本毛織株式会社や他の日本企業の事務室として使われていた。ニッケルのように建物の角を丸くしたようなデザインは一九三〇年代に流行した建築スタイルであり、百貨店の建物そのものが流行の最先端として道行く人にその姿を展示されていたのである。語り手はそのようにおしゃれでモダンな外観のニッケビルを「スマートに洋装したお嬢さん」にたとえているが、その「スマート」な外見に反して「彼女」が身にまとっている「オリジナル」香水の香りはぷんと鼻に押し寄せるくらい濃くきついのである。

「スマート」な洋装の出で立ちと重たくきつい香水臭の対比を通して語り手は、洋装や香水という装飾品で「スマート」でモダンな雰囲気を出ししようとしているが、バランスがとれておらず少し行き過ぎているニッケビルを皮肉っているように思われる。また「オリジナル」香水という名前も「オリジナル」という名前の香水とも取れる一方で、香水をまとってはいるけれど消し去ることはできないオリジナルの匂い(体臭)とも取れる。つまり「スマート」な洋装と香水を身につけることで流行の最先端を気取ってはいるが、すべての装飾を剥がした時に残るそのものの固有性が「スマート」という言葉とはかけ離れているということを示唆していると考えられる。

第四連で語り手は移動手段をそれまでの徒歩からバスに変え、その視線は第三連で「洋豚」と表象していたバスの中へと移る。西日が真っ赤に染まる夕方になると語り手が「この国の男女同胞の体温と重量に耐えたりも」と語っているように、

表には出てこない生の姿と「満洲国」に生きる一般庶民の生活の縮図がバスの中で繰り広げられていると解釈できる。国家としての理念は存在するものの実質的にバスを引率する「牧者」たる存在がいけないことはそれだけこの「超満員バス」の中の不快感と不安を大きくさせるものである。「王道楽土」や「五族協和」という「満洲国」が掲げた理想を具現化したような近代的な建物はバスの窓の外で実在しない「龍宮」のようにゆらめくだけでバスの中の世界とは遮断され、かけ離れていることが第四連では描かれているのである。

そしてバスの中という閉じられた空間の中で体は互いに密着して立っていても語り手のように雑木のごとく孤立してただその中の現状に耐える姿は「満洲」に生きる被支配民たちの姿であり、生活そのものであつただろう。ただじつと「耐える」生活から救われ、解放されるという保証もないまま、目的地がないバスのごとくただバスが動く方へ身をゆだね、ひたすら我慢することしかできない語り手の立場は故郷である朝鮮を離れて異国の植民都市に移って来た在満朝鮮人が、「満洲」で生き延びる方法であつたのかも知れない。

詩「季節の幻想」を発表する以前に朴八陽は一九四〇年十月二六日の『満鮮日報』に「新しい絶対と真理(上)」という評論文を「金如水」というペンネームで寄せている。そこには文学者としての彼が抱える苦悩と今後の方向性を模索する詩人の考えが赤裸々に語られている。以下はその評論文の一部分を筆者が日本語に訳したものである。

正直な告白をすれば、私は哲学をなくして生きている人である。私が今日に至るまで文章を書かなかつた理由もここにある。勿論ここで言っているのは、私の文筆の技巧がかなり優れているなどという意味ではなく、真実である意味の生活精神を失った人としてどのようにして真理を述べることができようかということである。小説も詩もすべてあるがままの生活の描写ではなく生活を理想化し、危機迫った現実的運命からは解脱せよという者の受難と悪戦する姿を見よ。もつと高い創造的生活の上から観照することである。したがって真実の生活精神を失ってしまった私如きは到底文を書くことができないのが事実ではないか。「なるように」生きる、これが最近の私である。⁽¹⁵⁾

朴八陽はこの評論文において、自身を「哲学をなくして生きている人」であると断定し、自身がそれまで文章を書かなかつた理由もそこにあると述べている。朴八陽が哲学をなくして生きるようになった原因は、彼の言葉を借りると「あるままの生活の描写ではなく生活を理想化し、危機迫った現実的運命からは解脱せよ」と強いる者の存在に原因があるようである。朴八陽ら文学者に悲観的な現実の生活を理想化し、あくまで楽観的な文学作品を書くようにと強いた存在は当然「満洲」におけるすべてのメディアを牛耳る満洲弘報協会であり、その弘報協会の定めるところによって監督を行う満鮮日報社の顧問たちであ

る。

一九四〇年になるとそれまで朝鮮人が務めていた満鮮日報社の重要な役職のほとんどを日本人が占めることになり、それに伴って『満鮮日報』に関する情報統制も厳しさを増していった。一九四一年の『満鮮日報』の「新春文芸懸賞募集」における募集作品の条件では、それまでなかった「明朗健全」や「開拓民が読んで慰安を得られる」といった文言が初めて見られるようになり、これはまさに朴八陽が評論文の中で自身が直面していることと述べている事態と重なるのである。彼は一九四〇年頃に満鮮日報社の間島支局長として任命されており、それまでも常に『満鮮日報』の編集や発刊までの過程に携わっていた立場の間として文学に対する政府や弘報協会の風向きがどう変わりつつあるかについては敏感に感知していたはずである。「満洲」において文学作品を書く自由がますます限定されている悲観的な状況下で彼は、自身の生活を偽る文学作品を書くのではなく、代わりに哲学を捨てて「なるように」生きる態度を選択したのだと考えられる。そのような朴八陽の葛藤と自身の振るまい方に対する消極的な選択は彼の詩「季節の幻想」における語り手の姿とそのまま重なるように思われる。

また朴八陽は「素服を着たお客さんがいらした」⁽¹⁶⁾という詩の中でも「私はどんな話もしたくありません／こう飾ったりああ飾ったりする美しい言葉／その言葉の後に続く嘘が嫌なので／いつそのこと私はどんな話もしないことにします」と述べ、何も語らないで沈黙を守る姿勢を自ら選択し、一歩外は吹雪で

荒れていても自分はただ一人孤独な部屋の中で沈黙を続ける姿勢を作品の中で示している。

同時代の在満朝鮮人は朴八陽同様「満洲」という異国の植民地で少数派の民族として孤立して生きなければいけない孤独と苦悩を味わいながらも、そのような苦しみをあるがまま文学作品に表出することも許されない不自由を強いられていた。その中で、た沈黙を貫く文学者もいれば、検閲をする側と謎かけをするごく奇抜な表現を羅列したモダニズム詩を書く詩人も現れるようになる。一方朴八陽は「満洲」に滞在していた期間中残した作品がたった詩二篇と『満鮮日報』に載せた評論文が全てであることから、創作の面においては確かに沈黙を守っていた。しかし詩「季節の幻想」においては植民地「満洲」の現実を凝視、傍観しつつもその中身に深く立ち入ることをせず、さりと植民都市新京の表面をなぞっては受け流すことで彼なりの皮肉を詩に込めたのではないだろうか。

三、都市表象に秘められている二重性——重いものと軽いもの二項対立が物語るもの——

朴八陽の「季節の幻想」は、語り手が徒歩あるいはバスに乗って新京の中心市街を移動しながら目にするさまざまな風景を表象することを通して、その近代的な都市の風景が孕む二面性や矛盾を徐々に明らかにしていく内容であることを詩の第一連から第四連を通して確認できた。そのような内容が語り手によ

って語られる過程において、繰り返し用いられている言葉が「重さ」であることにここでは着目したい。

その「重さ」が具体的にどのような形で語られているのかを詳細に見ていくと、詩の第一連では「私の重い行進の中で」（傍点は筆者）、第二連では「重厚な城廓」のような姿をしている康徳会館と「陸地の上の巨艦」のような海上ビルディングに対して、第三連では直接的な表現ではないが「洋豚」にたとえられているバスとそのバスが走る様子を豚が尻を揺らすさまにたとえているところから大きくて重いというイメージを連想することができると。そして第四連では超満員バスの中で語り手の体へのしかかる「この国の男女同胞の体温と重量」といったように、重さを強調するための様々な語句、または大きく重いイメージを読み手に呼び起こさせるような比喻表現が詩の各連ごとに用いられている。

そして語り手が感じる「重さ」はさらに視覚的に感じる重さと体で感じる雰囲気としての重さに分けることができる。語り手が視覚的に体感する重さとは主に詩の第二連と第三連に描かれているように、日本による植民地統治と都市建設の産物である西洋風の建築物とそれらが計画的に配置されている都市空間を循環するバスといった具体的な事物を語り手が目で見て抱く直感である。ところが詩の中では常に近代的な建築物の壮大さとその威厳を語ったあとにそれとは反対の軽いものを対峙させて相対立する構造を意図的に造っているようにみえる。

例えば第二連では新京でもっとも大きくて多くの主要道路が

集結する中心広場である大同広場に対して軽い白雪を対峙させ、その広場を雪が降り積もった純白の空間に変えてしまうことでその雪の下に隠れている広場周辺の首都警察庁や満洲中央銀行などの巨大な建築物に詳しく言及することを避けたのだと解釈できる。そして瞑想をしながら雪が降り積もっている真っ白な地面を踏み進めて大同広場を通過するところには、その場所がもつ意味とそこにある建築物の存在感を軽く受け流してしまふような語り手の態度を垣間見ることが出来る。

また第二連で登場した康徳會館や海上ビルディングをそれぞれ「重厚な城郭」と「陸地の上の巨艦」と表現しておきながら、第四連ではそれらの建築群を物語の中でしか存在しない架空の場所である「龍宮」にたとえることで一気に植民地建築群の存在を抽象化させているのである。

一方で語り手が体感する雰囲気としての重さは、見せるための近代的な装飾品で満ちあふれている「新京」の街を歩んで行ったり、時にはバスの中で一般庶民とひしめき合ったりという、いわば新京での生活そのものを感じる負担と疲労感と解釈することができる。このように詩の各連で語り手は「満洲国」の国都・新京の中心部を歩きながら街の風景を眺め、その景観の美しさと威厳に驚きを示しながらも新京の植民地建築が内包する矛盾と、ひいてはそれを造りだしている帝国日本の掲げる夢物語のような理想を批判することを重いものと軽いものの対比を通して密かに試みているのである。

さらに詩を読み進めて行くと、第五連で語り手は自身が乗っ

たバスを移りゆく季節に例え、そのバスに乗ってただ佇んでいまま季節が移り変わり、自分の青春が過ぎ去っていくことは嘆息すべきことだととして自らの青春の虚しさを吐露している。詩の第五連の三行目では、「どここの壁画に色褪せていない丹青があろうかとは思うが」と語っているが、この「丹青」は李氏朝鮮・大韓帝国時代の朝鮮の国旗を暗示していると思われる。現在の大韓民国の国旗でもある太極旗は中央に赤と青が合わさって円をなしている文様があるが、これは陽と陰が混ざり合っ

て調和を成すことの象徴であり、特に赤には尊貴、青には希望という意味が込められているのである。その赤と青の文様が描かれている壁画がどこも色褪せているということは一九一〇年の日韓合併後、この詩が書かれた一九四一年まで三〇年以上日本に国を奪われ、統治支配を受けるつらい経験を強いられていた母国朝鮮の現状を表していると考えられる。

第五連の四行目に書かれてある「久遠」という漢字は韓国語で読むと救いという意味の「救援」と全く同じ発音になることから、朝鮮がいつかは日本の植民地支配を受けている状況から救われて、自由になってほしいという語り手の願いが第五連に込められているように読める。詩の作者である朴八陽はあえて救いという言葉ではなく、代わりに同音異義語を用いることによつて、詩の最後で彼が母国朝鮮に対して抱く希望のメッセージを目立たせないようにしたのかもしれない。

語り手が詩の第五連で嘆息する青春が季節と共に過ぎ去ってゆくことから救われることはそれまで彼が大同大街を移動しな

から目にしたどのようなものによっても叶えることができなかった。むしろ帝国日本の力によって造りだされた首都「新京」の姿はその華やかで壮大な外観に反して、語り手の目には今にも消え失せそうな不安をまといている存在として映っており、その不安感は植民地「満洲」で被支配民として生きる彼らが共通して抱いていた気持ちであったのかもしれない。

しかし、そんな不安を抱きながらも語り手は、自分の内面には自然そのままの岩を求め、また時には「奔放な舞女」のように多彩で華やかな文化を求めることによって得られる恍惚とした感情を欲す二つの対立する気持ちがあることを詩の終わりまで告白している。つまり人の手によっても汚されていない自然そのままの姿を欲している心と日本が内外に見せるために作り上げた「夢溢れる」近代都市の文化を享受することを欲するという二重の気持ちの実が語り手の中にも共存しているのである。

「沈黙」と「饒舌」。この二つは自己が抱える二面性を認めながら語り手が最後に選択した植民都市「満洲」で生きる手段と言える。「満洲国」が掲げる理想ばかりの建国理念とその一方で行われている支配的な政治に不満を抱きながらも、沈黙を守ることでできない被支配民としての自分の境遇と、この傀儡国家「満洲」で行われている植民地統治政策を讚美し、宣伝しなければならぬ満鮮日報社の社員としての朴八陽の葛藤する姿をここに垣間見ることができよう。植民都市「新京」の街同様に、自身のなかにもまた相反する二面性を抱えながら、虚し

く異国の植民地で生を送らなければならない自分自身の境遇を朴八陽は皮肉って、『満鮮日報』へ掲載する際この詩の作者名を彼のペンネームではなく、「放浪児」と名づけたのではないだろうか。

四、李吉生「大同大街」に見られる暴力性

植民都市新京の中心であり、日本の自慢であった大同大街を詩の題材としたのは朴八陽だけではなかった。李吉生という詩人も一九四〇年五月一六日の『満鮮日報』に「大同大街」というタイトルで詩を一篇寄せている。その詩は以下のようなものである。

大同大街⁽⁷⁾

南嶺まで駅から

まっすぐのびた

国都の大動脈

建物の装備は二十世紀の歴史

ロータリーをまわっていく

運転手のハンドルが慎重なのは

ガソリンが戦争の第一手段であるからだ

おめかしは女性の生命

ブルボン王朝の遺物

馬車の上に人造絹の机の脚が

真つ裸の馬

コンバクトのガラスに赤い唇が

不慣れな『多兎銭』

一角銭一枚

爆撃機の咆哮

低空を旋回するとて

協和服を着た斜め掛けカバン

国策を論じ

口角に白い泡が浮く

マ・ゲ・ロ・刺身に

ニンニクと唐辛子で薬味を振り

バターをつきませた傑物に

この国の善良な国民の味覚が適合する日

五族協和

大満洲国に行く先は

大同大街を滑るタイヤのごとく

平坦な未来が祝福されるのだろうか

ピンプレメントに

街路樹の青い芽が生える

この詩は「風物詩帖」として大同大街の手書きの絵とともに『満鮮日報』に掲載された。(四五)この詩が掲載された一九四〇年は日本にとって神武天皇即位記念二六〇〇年という年で内地では大変な祝賀モードの中、盛大な記念式やパレードなどが催された年であった。そもそも内地において紀元二六〇〇年を祝う動きが出て来たのは当時の日本政府が天皇を頂点とする国家支配の正当性を国民に植え付けるためであり、そういった大きな国のイベントを政府と国民が一緒に祝う雰囲気作りをしていく中で国民の精神を統一し、戦争中の士気を高める狙いがあった。

おそらく「満洲国」の国都新京を詠った詩が『満鮮日報』に掲載されたのもこれまでの日本の対外植民地政策が軌道に乗っていることを内外にアピールするためであっただろう。そのような時代背景も相まって李吉生の「大同大街」は国策に協力的で親日的な文学作品として烙印を押されてしまったまま、これまで特別先行研究の中でも取り上げられることがなかったのかもしれない。

李吉生という詩人についてはこの作品以外にも「花売り（原題—꽃팔사）」と「安奉線」という詩があり、いずれも一九四〇年に『満鮮日報』に掲載されたものである。それ以外には彼が朝鮮や「満洲」で活動した形跡は確認できず、彼の人物像もまだつかめていないままである。ただ『満鮮日報』で発表したこ



大同大街

李吉生



靑島의 저
마르코비치
國都의 大動脈

建物の 裝飾은 二十世紀의 歴史
로 100년을 도라가는
題詞 李氏의 功業이 垂示스런 功業을
외 소련이 題詩의 第一 手段이 나마
문치상은 女子의 生命
을 主體의 直物
形像의 功業에 人道의 功業의 功
을 功業의 功業에 功業의
서 부는 多兒의 功業

對內 功業

揚聲의 功業

低聲을 範圍의 功業

線和 線을 功業은 功業의 功業

國都의 功業

口內에 功業의 功業

마주모시시의 功業

마술과 功業의 功業을 功業

따다 功業은 功業의 功業

이나마 功業의 功業에 功業의 功業

五洲의 功業

大東의 功業의 功業

大同大街을 功業의 功業은 功業의 功業

平壤의 功業의 功業의 功業

平壤의 功業의 功業

功業의 功業의 功業

の詩の中で新京が「満洲国」の国都であることを認めるような表現をし、大同大街は「国都の大動脈」であると詠ったことが傀儡政権である「満洲国」とそれを作った日本に対する讚美ととらえられたのではないかと思われる。

しかし詩の内容を詳しく見ていくと「大同大街」を新京の風物詩として読むには違和感を感じる表現や言葉があるように思われる。例えば第二連では大同大街に立ち並ぶ建物群は二〇世紀の歴史そのものだと言っておきながらその後すぐ対象が道路の走る車の運転手に切り替わり、戦争のために需要が多いガソリンを少しでも節約するため、慎重にロータリーのカーブを曲がる運転手を描写している。街の建物や道を走る車からいきなりその連想が戦争へとつながるのはこの詩の読み手からすれば大変唐突な転換であり、第二連の流れにおいても「戦争」という言葉は異様な存在感があるように感じられる。大同大街やそこに並ぶ近代的な建物群からはなかなか想像しにくい戦争という単語をこの詩の語り手はわざわざ持ち込んで読み手に提示し、想起させるように思われるのである。

次に第三連ではおしゃれに目がない女性に対し、自分自身を着飾ることに余念がないのもブルボン王朝からの遺物であり、一九四〇年の新京でも中世フランスからの文化の流れが受け継がれているのだと述べている。フランスのブルボン王朝と言えば一六世紀から一九世紀前半まで長く続いた王朝でこの期間に絶対王政が確立し、華やかなヴェルサイユ文化が発展したことで有名である。長く続いたこの王朝の間で有名な女性とい

えばマリーアントワネットであろう。ファッシヨンの文化も彼女の時代にもっとも華やかさを極めたのだが、一方でマリーアントワネットの時代の貴族の社交界はより華やかに着飾り周囲の視線を集めることを競うあまりそれがエスカレートし、過剰で滑稽なドレスや髪型を生んだこともよく知られている。

おそらく詩人・李吉生はそのような歴史的な背景も承知の上で新京の街に見えるモダンガールたちをブルボン王朝の女性貴族に重ね合わせて見たのだらう。第二連の冒頭は新京のモダンガールたちの美へのこだわりを示唆するとともに、ファッシヨンに執着するあまりどんどん過剰に演出するようになっていたフランス貴族の歴史が時代や場所が遠く離れた「満洲」の地で繰り返されていることに詩人なりの皮肉や批判的な感情が込められていると考えられる。

詩の第三連では語られる対象が街の風景からお金へと急に切り替わっている。「満洲国」が日本によって強制的に作られた一九三二年に一度「満洲」における貨幣が統一されるのだが、一九三四年に世界的に銀の価値が高騰するとそれまでの銀本位制から日本円を基準とする管理通貨体制に移行されたり、一九三九年に貨幣法が改正されると硬貨の種類が変更されたりと何度か政府による試行錯誤があった。語り手が第三連の冒頭で「不慣れ」だと言っているのはおそらく一九三九年の貨幣法の変更により変わったばかりの硬貨のことであり、それを使うことにならぬ慣れないことへの不満を言っているようである。

そして第四連ではそのような貨幣のことや戦争のこと、「満

洲国」を統治する上での国策を論じる「満洲国」の官僚たちに連想が及ぶのである。当時の人々が新京の中心街を歩いていて「爆撃機の咆哮」やそれが「低空を旋回する」ことに出くわすことはまずなかったはずである。しかし詩人は第二連に続き第五連でも大同大街に見える景色から容易には連想できないような戦争の緊張感や爆撃機の恐怖をわざわざ詩の中に持ち込み、目に見えないところで練り広げられている暴力とそれを裏でコントロールする協和服を着た官僚たちの姿を詩の言葉を通して現前させるのである。

戦争のための爆撃機や植民地「満洲」の国策のために激論を交わしているであろう官僚たちの口角に白い泡がたまる光景は大変緊張感が感じられ、一方でその場面を想像すると少し滑稽に感じられる。「戦争」や「爆撃機」などの単語がすでに詩の中で登場していたのでその後軍人官僚が熱心に論じる国策の内容が読み手に戦争や武器と結びつきやすくなる効果が生まれ、それらが合わさって第六連への伏線として作用するのである。というのはこの詩の中でもっとも意外性があり、詩の流れを大きく変えてしまう役割を果たすのは詩の第六連だからである。それまで第二連から第五連まで語り手が描いてきたさまざまな対象を語り手はひとまとめにして「マグロの刺身に／ニンニクと唐辛子で薬味を振り／バターをつきませた傑物」だと言ってしまうのである。この強烈な表現はそれまで登場した「戦争」や「爆撃機の咆哮」をもしのぐほどの存在感を詩の中で表している。しかもそれまで大同大街で目にするものやその裏

側に潜んでいる背景を諷刺するのとどまっていたのに比べると第六連の内容は大同大街に対する言葉の暴力であるようにさえ感じる。

日本あるいは日本的なものの象徴とされるマグロの刺身に韓国や中国の料理によく使われるニンニクと唐辛子、これに西洋のバターをつきませてきたのがまさに大同大街とそこを飾る近代的な建築物と消費文化であるというのが詩人がこの詩を通してもっとも伝えたかったことではないだろうか。そして丁寧で繊細な味とはとても思えないそのマグロの料理に「善良な国民の味覚が適合する日」という表現から詩人李吉生が日本政府が新京に作りだした植民都市と建築物に少なからず違和感や批判的な視線を持つていたであろうことが伺える。

この詩の最後は一見五族協和を謳う「満洲国」の未来が大同大街を滑るタイヤのごとく順風満帆であることを詩人が祈願しているように見える。しかしそれには善良な国民が従えばという条件がつき、その条件が満たされたとしても「大満洲国」の未来が「祝福されるのだろうか」というふうな疑惑付きの表現で思いをはせるに止まっているのである。なぜならば「満洲」のさまざまな民族を乗せた車は戦争に使われる軍需品が滞りなく提供されるためにスピードを出して滑り出すことはできず慎重にハンドルを回しながら進まなくてはならないからである。以上のように李吉生の「大同大街」という詩は新京の風物詩である大同大街とそこに立ち並ぶ近代的でおしゃれなビルディング群を描き「満洲国」の面貌を自慢しているかのように見え

るが、大同大街を語るには詩の内容にまとまりがなく、各連ごとの視線の移り変わりや話題の変換も唐突であるという印象を受ける。

また大同大街の街や建物、人を描写する中に突然「戦争」や「爆撃機」など当時日本と中国の間で繰り広げられた日中戦争を連想させる言葉を意識的に用いることで、詩の流れに強い緊張感を持たせている。直接目には見えないところで起こっている暴力の実体を暴いたり、その集団的な暴力を画策し、動かす「満洲国」の官僚や軍人の存在も皮肉を込めて描いたりすることにより大同大街やそこに存在するあらゆる建築物ができるまでの裏側を可視化させていると考えられる。モダンで近代的な装飾で飾られた新京の街が出来上がる前提にあつた植民地支配という暴力に対し、語り手はその結果物をひっくり返すためマゲロとニンニク、唐辛子、そしてバターと一緒に混ぜた結果物が大同大街であるという言葉の暴力を投げかけた。つまり詩人は「大同大街」という巨大な装置を利用して「大同大街」をあらしめた権力の存在を示唆し、これからの「満洲国」の進む先の不安を読み手に提示しているのだと考える。

五 おわりに

本稿では『満鮮日報』に掲載された朴八陽の詩「季節の幻想」と李吉生の「大同大街」を細部にわたって考察することによって、詩の語り手が植民都市新京の街の風景をどのように切り取

って眺め、表象したのかを詩の分析を通して考察した。どちらの詩も先行研究や本の中で偽「満洲国」の国都新京を讀える親日文学と位置づけられることが多かったが、本論ではこれら二編の詩が植民都市新京の二面性を描いており、「満洲国」の行く先に不安を提示している作品として解釈した。

朴八陽の場合は新京という植民都市が孕む二面性を重く大きい建築物や乗り物と軽い雪や香りの対比を通して徐々に詩の中で浮かび上がらせ、王道楽土を作ろうとする夢と実際の現実をパスの外と中両方から描くことでより読み手にその行く先の不安を印象づけている。李吉生の「大同大街」は名前の通り大同大街とそこに見える新京の風物詩を描いてはいるが、各連ごとに頻繁に描く対象が切り替わり、全体としてまとまりに欠け散漫な印象をうける。しかし一方ではあらゆる民族やその文化が集結した場が「満洲」そのものであり、それを日本が力尽くでまとめて支配しようとすることで生じる混沌と摩擦が雑然とした詩の雰囲気によつて表現されていると考えることができる。「大同大街」の風景からは連想しにくい「戦争」や「爆撃機」などの言葉を突然登場させることで大同大街には見えないところで起こっていることを否応なしに想像させ、大同大街にあるあらゆる建築物を作った存在と戦争を国策として論じている存在が同じであることこそが詩「大同大街」で詩人が伝えようとしているメッセージではないだろうか。

※本稿においては、資料を引用する際、漢字の旧字体は新字体に改めた。た

だし、人名の旧字体はそのまま掲載した。

【注記】

1 一九三七年十月二日から終戦までの期間、新京で発刊された朝鮮語新聞である。しかし現在残っているのは一九三九年十二月一日から一九四二年十月九日までの部分のみである。

2 『満洲詩人集』第一協和倶楽部文化部、一九四二年九月

3 朴八陽(ハクパルリヤン) 박팔양、一九〇五〜一九八八年は筆名は「麗水」、「金麗水」、「麗水山人」、「如水」等である。韓国の詩人であり、言論家である。一九〇五年朝鮮の京畿道水原市で生まれ、一九一六年に京城府に移って、培材高等普通学校や京城法学校で学んだ。培材高等普通学校の同級生には後に朝鮮プロレタリア芸術家同盟(以下KAPF)の主導勢力となるバク・ヨンヒ、キム・キジン、キム・ボクチンらがいる。一九二五年に朴八陽自身がKAPFに加入する契機になった。また京城法学校門学ではチョン・ジョン、キム・ファサンと交流しながらチョン・ジョンのモダニズム的傾向とキム・ファサンのダダイズム的な傾向にも影響を受け、一九三四年にはKAPFとは正反対の立場の「九人会」にも加入する。一九二三年『東亜日報』の新春文芸に「신의 주(神の酒)」という作品を発表することで登壇し、京城法学校卒業後は、一九二四年から一九二五年までに『東亜日報』の社会部記者を務め、一九三一年『中外日報』が『中央日報』として再創刊される際は社会部長を担当する。そのような経歴も手伝ってか、一九三七年に満洲に渡ってから満鮮日報社に入社し、社会部長及び学芸部長を務め、その地で終戦を迎えた。終戦後は北朝鮮に渡り、作家・言論家として活躍した。

4 新京で一九三三年八月二五日に創刊された朝鮮語新聞で、『満鮮日報』

の前身であった。

5 中国・間島地方の龍井で発刊されていた朝鮮語新聞で、一九二四年十二月二日に日本語新聞である『間島新報』から韓国語版が分離独立して発刊された。それ以降一九三七年十月に『満蒙日報』に買収・合併されるまで続いた。

6 『満鮮日報』には定期的に「新春文芸懸賞募集」が催され、ここでは主に以下のような作品を積極的に書いて応募するように謳われている。(以下拙訳)

一九三九年十二月五日：「満洲または支那等大陸における朝鮮人の生活を主題とし、可能な限り実話的なものにする。」

一九四〇年十一月十五日：「満洲国または支那大陸で営まれた朝鮮人の生活の中から取材した実話的なもの。」

一九四一年十二月五日：「大陸に取材し、明朗健全かつ国策推進に力を加え、開拓民が読んで慰安を得られる価値のある作品」

7 チェ・サムリョン「朴八陽の二つの顔とその表情」『世界韓国語文学第五集』、世界韓国語文学会、二〇一一年四月(최삼룡, 박팔양의 두 얼굴과 그 표정』세계한도어문학 5집』세계한도어문학회, 2011.4)

8 コ・ボンジュン、イ・ソニ「一九三〇年代後半詩の都市表象研究——オ・ジャンファン、キム・クァンギョン、朴八陽を中心に」『韓国詩学研究』第二五号、韓国詩学会、二〇〇九年八月(고봉준, 이선이, 1930년대 후반 시의 도시 표상 연구——오정환, 김관근, 박팔양을 중심으로) 『한문시학연구』제25집』한문시학회, 2009.8)

9 チェ・ユンジョン「朴八陽詩研究」『韓国文学理論と批評』第六六集、韓国文学理論と批評学会、二〇一五年三月(최영정, 박팔양 시 연구) 『한국

문학이론과 비평』 제 66집 『한국문학이론과 비평학회』, 2015.3)

10 「滿洲国」建国十周年という「記念すべき」年に吉林で発刊された同詩集には、柳致環、尹海榮、申尚實、宋鉄利、趙鶴來、金朝奎、咸享洙、張起善、蔡禎麟、千青松、朴八陽など十一人の詩人の計三十七編の詩が載せられている。

11 朴八陽「季節の幻想」『滿鮮日報』一九四一年一月一九日。以下に『滿鮮日報』掲載されていた詩「季節の幻想」を韓国語で原文のまま掲載する。

季節の幻想

放浪児

아름저녁으로 다니는 나의거리는

나에게잇서 한개의 그윽한密林이외다

沈黙하며 짓는 나의무거운 行進속에서

나는 五色의 꿈과 무지개를 봅니다。

白雪의 大同広場우에 瞑想을 밝으며

世紀의 驚異속을 나는 移動합니다

康徳會館은 正히 中世期的의 육중한 城廓

海上「백만」은 陸地우에 巨艦의이다。

『백스』는 구공둥이를 뒤흔드는 양도아지떼
牧者도업시 틀틀거리며 불려오고가고

『니게』는 『스마트』하게 洋裝한 아가씨
『오리지널』香水 내음새가 물결 물러들니다。

大陸의太陽이 西便하늘우에 眞紅이 될 때

나는때로 超滿員 『백스』속에 雜木처럼 佇立하여

이나라 男女同胞의 体温과 重量을 堪耐하기도 합니다

窓外에는 建物들이 龍宮처럼 어룬거립니다。

季節을타고 青春이 逃亡간다는것은

『센치멘탈리스트』가 아니라도 嘆息할은이지요

어느곳 壁面에 褪色하리한 丹青이 잇스릿가만은

罪업는 童心이 久遠의 青春을 꿈꿉니다。

広野를 航行하는 이 思索하는 雜木이

때로는 行者와가치 素朴한 바위를求하고

때로는 奔放한 舞女처럼 多彩와 恍惚그리며

沈黙과 饒舌속에 헛되히 季節을 送迎합니다。

12 『滿鮮日報』では「 밝으며 (現在使われていない表現ゆえに当てはまる意味はなし、筆者注)」となっているが、『滿洲詩人集』では「발브며(踏みながら、筆者注)」に変えられている。『滿鮮日報』に掲載されている方は、言葉として意味をなさないことからともと作者が意図していた言葉の意味は

『滿洲詩人集』で改められた「발브며」であると考えられる。本文に載せている詩の日本語訳も『滿洲詩人集』で書き改められた方の単語の意味を取って日本語に訳したものである。

13 『滿鮮日報』では「陸地위에 (陸地の上に、筆者注)」となっているが、

『滿洲詩人集』では「陸地위의 (陸地の上の、筆者注)」に変えられている。

一方の表現をとることで詩一行全体の解釈が変わってしまうほどの差異はなく、また、『滿洲詩人集』での助詞の使いの方が韓国語の文法上正しいと言えることから、『滿鮮日報』における助詞の印字ミスが『滿洲詩人集』では訂正されて掲載されたものと思われる。

14 西澤泰彦「日本の植民地建築―帝国に築かれたネットワーク」河出書房新社、二〇〇九年十月

15 金如水キムニク「새 絶對와 眞理 (上)」(題名の日本語訳「新しい絶對と眞理 (上)」) 『滿鮮日報』一九四〇年一〇月二六日

16 朴八陽「素服を着たお客さんがいらした」『三千里』(原文タイトル「소복 입은 손님의 오시다」『삼천리』一九三九年一月

17 李吉生「大同大街」『滿鮮日報』一九四〇年五月一六日。

以下に『滿鮮日報』掲載されていた詩「大同大街」を韓国語で原文のまま掲載する。

大同大街

李吉生

南嶺까지 駅에서

마로배친

國都の大動脈

建物の裝備는 二十世紀의 歴史

로―타리를 도라가는

運轉手氏들이 조심스러운 것은

가소린이 戰爭의 第一手段이니라

몸치장은 女子의 生命

불봉王朝의 遺物

馬車의 우에 人造絹의 靑상다리가

벌거숭이의말

콤박트의 유리에 붉은 입술이

서투른 『多兒錢』

쇠角錢한푼

爆撃機의 咆哮

低空을 旋回하느니

協和服을 입은 오리가방

國策을論하야

口角에 흰거품이 뜬다

마구로사사마에

마늘과 고지로 藥味를쳐서

빠다―를 찢은 傑物에

이나라 善良한 國民의 味覺이適合하느날

五族協和

大滿洲國の압길은

大同大街를 미끄러지는 아이야처럼

平坦한 압날이 祝福될진지

벨푸덴트에

街路樹푸른순이 돛진다

【図版出典】

図一 水島吉隆 『滿洲帝國の戰跡』 河出書房新社、二〇〇八年七月

図二 南滿洲鐵道株式會社 總裁室弘報課 『思い出の寫真帖 滿洲概觀下』

國書刊行會、一九八七年三月

図三 國分修 『寫真集 さらば新京』 國書刊行會、一九七九年四月

図四 『滿鮮日報』 滿鮮日報社

図五 越沢明 『滿洲國の首都計畫』 日本經濟評論社、一九八八年十二月

(九州大學大學院比較社會文化學府博士後期課程)